

目次

2013年度 第12期 事業報告

この1年.....p2

ラオスでのプロジェクト

I. 本に出会い、親しむ(読書推進活動).....p3

II. 本をつくる(出版プロジェクト).....p4

III. 集い、表現し、学び合う(子どもセンター).....p5

日本での活動.....p6

組織運営.....p7

2013年度 第12期 会計報告.....p8

2014年度 第13期 事業計画・予算.....p9



2013年度 事業対象地域図



「ラオスのこども」とは？

はじめに

1982年、ベトナム戦争後の長引く混乱と停滞の中、東京在住のラオス人と日本の友人とが、「ラオスの子どもたちも日本の子どもたちと同じように絵本を楽しんでほしい」と幼稚園のバザーなどで集めた絵本をラオスに送りました。これが「ラオスのこども」の活動の始まりです。

足どり・活動の柱

本も書店も図書館もほとんどなく、読書を習慣とする人も少ないラオスでは、多くの先生にとって、絵本は初めて出会うものです。1990年代に入り、会はラオス語の絵本出版を開始。あわせて、子どもと本をつなぐ先生のトレーニングなど読書の推進普及に力を注ぎました。また、学校では音楽、図工、体育や部活動が行われていないことから、そうした活動ができる児童館のような「子どもセンター」を各地で開設支援しています。

めざすもの 子どもは未来をつかみたい

「ラオスのこども」の活動の目的は、子どもが自らの力を伸ばし、人生を主体的に選択する権利を全うできる社会、公正で平和な地球社会づくりに貢献すること

です。日本、ラオスをはじめ多様な人々の参加によって、同時代を生きる地球市民としてともに成長していくことをめざします。

これまでの取り組み

当会は読書推進活動の拠点として、学校に焦点をあて、各校を巡回訪問し、状況に応じた指導を繰り返し丁寧におこなうことで、学校での図書活動が活発化しています。ラオスの小中高校10,421校(小学校8927校、中学校1494校 ラオス教育スポーツ省)のうち、今年度末までの累計で、246校で図書室を開設し、2,732校に図書セットを配付。2,318校でフォローアップをしました。

出版では、民話、創作絵本、コンテストの入賞作、テキストなど、新人からベテランの作品まで、多彩な書籍を出版しています。これまで、ラオス語図書 197種類 84万冊(図書167/紙芝居14/教科書類6/ニュースレター10)を現地で出版しました。

学校外で子ども同士様々な活動ができる「子どもセンター」では、プログラム運営支援と、スタッフの能力向上のための研修に取り組みました。これまでに全国12ヶ所の子どもセンターの支援をしてきました。

この1年

ラオスの状況

ラオスの経済成長は、ASEAN一の経済成長で大変順調です。ヴィエンチャンの街を走る車はますます増え、あちらこちらで、大型ショッピングセンターや大規模店舗の建設のためのクレーンが立っています。高等教育を受けた若者たちの初任給は上昇を続け、250ドルは当たり前。30歳の給与は1000ドルでも驚かないという感じです。確かに物価も上昇していますが、都市の若者には、それ以上にバブルとでもいえるような、「上昇気流」が吹いているように感じられます。着実に知識を積み重ね、己の世界を広げていくというより、今日の消費の波にいかに乗るかが関心事になっているように見えます。「井の中の蛙」という思いもありますが、昨今、ラオス社会、若者から、「自信」のようなものを感じます。

数年にわたり問い続けている、「私たちNGOは、誰のために、どのような役割を担うか」について、答えはまだ明快ではありません。ラオス事務所での会議で「ラオスでの弱者＝少数民族の人々に対する働き掛けを強めよう」との日本側に対し、「外国人は弱者＝少数民族とイメージするが、全く同意できない。支援は少数民族に多く集まりすぎている」との反論がラオススタッフからありました。

一昨年に発生した、ラオス人社会活動家の失踪事件の波及か、NGO活動に対する政府の監視は強くなり、一時、活動許可(MOU)が非常に निकくになりました。そのあおりで、会とJICAの協同プロジェクトが開始できなくなり、財務は危機に陥りました。多くの皆さまからの緊急支援により、危機を越えることはできましたが、根源的な問題は未解決で、大変困難な状況が続いています。



活動の課題、重点的取り組み

今年度から始まった第6次中期計画は、NGOの役割の再確認とラオス事務所の自立のための組織強化を基本としています。この一年、現地に於ける組織活動のルールの再検討、認識の共有化がおこなわれ、資金調達についても、ラオス現地での働き掛けが積極的になされ、成果も見えるようになっていました。しかし、子どもたちに読書の楽しさを伝えたいというミッション・使命を自らのものとし、今後を担っていこうという人材が、育ってきたとはいえません。数年にわたり準備を進めてきた、読書推進活動を学校から「地域」を巻き込んだ活動に広げる新しい試みが、ラオス事務所のイニシアチブのもと始まりました。

常に大きな問題である財政については、より多くの皆さまにご支援をいただくために努力し、一般寄附や物販などで一定の成果はありました。しかし、MOU(覚書)締結の遅れによる影響は大きく、決算はこれまでにない悪い状況となりました。ラオスの子ども支援の共感の輪を広げるためには、もっと積極的な活動が必要です。

ラオス教育データ

ラオス全国小学校(1年～5年)の就学率の推移

年度	純就学率(%)		
	計	女子	男子
1995/96		65	72
1999/00		74.2	80.3
2004/05		76.9	80.8
2006/07	86.4	84.5	88.1
2010/11	94.1	93.3	94.9
2012/13	96.8	96.0	97.5

小学1年生の純就学率 2012-2013

計	女子	男子
93.4%	92.9%	94.0%

小学1年生のドロップアウト率 2012-2013

計	女子	男子
11.0%	10.7%	11.3%

残存率(入学した児童が卒業する割合) 2012-2013

全国平均	70.6%
(最低) サラワン県	47.5%
(最高) ヴィエンチャン都	91.6%

中学校進学率と純就学率 2011-2012

小学卒業者の中学進学率	90.1%
中学校(中1-4)純就学率	69.0%
高校(中5-7)純就学率	37.3%

(出典)教育省統計情報センター (2010年度以降は、Annual School Census)

純就学率:教育を受けるべき年齢に、実際に教育を受けている人の割合

I 本に出会い、親しむ（読書推進活動）

ラオスの小学校では、教科書が1人1冊揃わない地域が多く、学校で読み書きを習っても、学校を離れると日常で文字にふれる機会がなく、やがて読み書きを忘れるという状況が続いてきました。多民族、多言語社会でありながら、授業は公用語のラオ語のみということも読み書きの習得のハードルとなっています。当会では、ラオス国立図書館、教育スポーツ省と連携し、1992年から約3,000校に図書を配付、246校に図書室を開設し、読書習慣の普及をおこなっています。子どもと本をつなぐ役割を担うのが先生ですが、読書習慣を持たず、給与が安く、農業などの兼業で教育へのモチベーションが高くない、といった例は少なくありません。そのため当会は、先生が本に関心を高めるよう、多方面からアプローチをしています。

学校でもっと図書を活用するための活動

絵本をもとに劇を演じるなど授業に絵本を取り入れ、子どもの学ぶ力を高めることを目指し、4県36小中学校を対象に、2年にわたり活動しました。十分な活動ができていない学校には、繰り返し丁寧に指導することで、図書活動の活発化に結びつけました。今期、事業の最終段階として、全対象校をフォローアップし、評価まとめの研修をおこないました。



【事業開始時からみられた成果】

図書室を週5日以上開放している学校が22校から34校に増加
図書貸出を定期的実施する学校が19校から34校に増加
「読み聞かせ」を実施する学校が14校から32校に増加
図書を活用した「演劇」「詠唱」を実施が4校から32校に増加
科学本や学習科目での図書活用が2校から14校に増加
子ども達が図書を利用出来る時間や機会が34校で増加
図書室利用の機会が増え、読書好きになった中学生が、ラオス語のコンテストで3位入賞したという事例もみられるようになりました。

(小中学校における図書活用強化事業(第1期・第2期)／
外務省 日本NGO連携無償資金協力事業)

地域で支える学校図書室活動への展開

地域住民を図書活動サポーターとして巻き込み、学校の図書活動の担い手の裾野を地域に広げる事業で、ルアナムター県、ヴィエンチャン県の6郡において、4年間にわたり活動します。

2014年2月に事業開始となり、今期は聞き取り調査をも

とに、事業対象校16校を決定しました。また、6月には、14名の教育指導官を対象に、図書活動に関する能力強化研修を実施しました。

(JICA国際協力機構 草の根技術協力事業)



6県15小中学校に図書室をオープン

空き教室などを利用した図書室開設を、今期は6県8小学校と7中学高校でおこない、併せて先生向けの研修を実施。合計6,302冊の図書を配付しました。

ボリカムサイ県にて、稼働していない図書室2ヶ所を、設備や蔵書をより有効に活用するために、移設しました。移設先の対象年齢に合わせて蔵書を追加し開設しました。また、2011年度以降に開設した図書室28校に対し、補充図書セットを送付。うち11校には、スタッフが訪問し、運営アドバイスをしました。こうしたフォローは先生方の意欲向上にとっても重要です。

事務所併設こども図書館の運営・イベント開催

事務所併設こども図書館は平日と土曜に開館し、近隣の3つの小中学校の子ども達を中心に、1日平均36人が来館しました。図書貸出は日平均9冊で、利用者数・貸出数ともに減少しました。利用が減少している理由としては、子ども達の生活が変化し、様々な習い事やレジャーをするようになったことが考えられます。しかし、工作などのワークショップは人気が高く、紙芝居や詩の朗読、映画上映といったアクティビティ、日本からの訪問者との交流での体験では、子ども達は楽しく時を過ごしています。

Ⅱ 本をつくる（出版プロジェクト）

ラオスでは、未だに首都でも書店がほとんど見当たらず、本を目にしません。子どもたちが本に親しむには、ラオス語で書かれた作品が不可欠ということで、会は1990年から絵本を中心にラオスでの出版を手がけてきました。作家がほとんどいない中、日本人やタイ人の専門家による絵本作りセミナーを開いたり、コンクールを通して作家を発掘、育成し、これまでに累計197点84万部の書籍や紙芝居を出版しています。

近年は消費社会化が進み、ファッションや流行情報を発信する雑誌も登場し、出版を取り巻く状況は急速に変化しつつあります。子ども向けの書籍は、NGOや援助機関による無償配布が前提となっていることもあり質の向上が課題です。会は「子どもの心に灯をともし」ような、質の高い本作りを目指しています。

出版、5作品、約1万部を出版

今期は、図書5作品、計10,500部を出版しました。新刊3作品、再版2作品です。



かんたんごはん ～作ってかんたん、食べて健康～

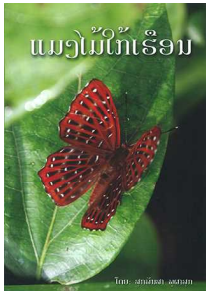
500部 再版(昨年度3000部出版し、追加印刷)

文) パーラー(ラーおばさん)

写真) スックパンサー プパスック

子どもに必要な栄養の知識をわかりやすく解説したラオス料理のレシピ集。自然と共に育んできたラオスの食文化は、都市部を中心に大きな変化が起きている。毎日の食生活を考えるヒントとして欲しいと、雑誌「ランカム」に連載した記事をまとめたもの。中学校の家庭科の授業にも活用しやすいと教員からも好評。

《支援: 日本NGO連携無償資金協力 他》



家のまわりの虫

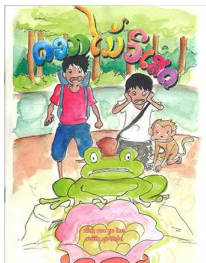
2,000部 新刊

文) スックパンサー プパスック

写真) スックパンサー プパスック、他

虫の図鑑。森の国ラオスでは、虫は栄養価の高いごちそう。でも首都ヴィエンチャンでは気持ち悪がる子ども達も。身近な虫に興味を持ち、生物多様性を考えるきっかけになってほしいとの思いから、この図鑑が生まれた。アリ、チョウ、サソリ、など20種類を取り上げ、生息域、変態、食物連鎖、ラオスの伝統文化、諺などを解説。

《支援: 地球市民財団》



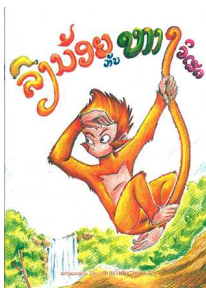
魔法の花

2,000部 新刊

文・絵) アピシット スパヴンタイ

創作絵本。絵本作りワークショップに参加した青年が制作したオリジナルストーリー。物語は、おばあさんの病気を治そうと、魔法の花を探す兄弟のお話。しかし、それは人間をカエルに変えてしまう花だった。

《支援: 日本NGO連携無償資金協力、指定募金》



子ザルとまほうのしっぽ

3,950部 新刊(2007年に当会が出版した作品の改訂版)

文・絵) サワンサイ スワンペン

創作絵本。昨年出版した『外国のむかしばなし』が既刊絵本の絵に似ていたことから、回収の差し替え版として出版したもの。物語は、トラに群れを襲われ、しっぽをなくした子ザルは仲間はずれにされるが、神様から与えられた魔法のしっぽで仲間を助けるお話。

《支援: 学習院

女子大学、日本NGO連携無償資金協力》



カンパーとピーノイ(孤児と小さなおばけ)

4,000部 再版

再話) ドゥワンドゥアン

ブンヤヴォン

絵) ヴォンサヴァン

ダムロムスック

ラオスで最もよく知られている昔話で人気が高い。ジャングルで暮らすカンパーに、悪さをしようとしたお化け達は、神様から諭され、カンパーの畑仕事を手伝うようになり、一緒にご飯を食べるようになった。カンパーがゾウからもらった象牙を大切にしていると、その中から美しい娘が現れ、仲良く暮らすようになったというお話。

《支援: キヤノン株式会社、他》

Ⅲ 集い、表現し、学び合う（子どもセンター）

ラオスの学校は、座学による暗記中心で、音楽、図工、体育はカリキュラムはありますが、指導できる先生がいない、用具がないなどで、子どもたちの情操面を伸ばしたり、チームでの活動をする機会がほとんどありません。1994年に国会などの協力・支援により、音楽、舞踊、図画工作などの表現活動ができるラオス初の子ども施設として、情報文化省による「子ども文化センター」が開設されました。その後、全都県に設置されましたが、講師の雇用、教材費、行事開催などの資金確保は容易ではありません。近年、活動がマンネリ化してしまったり、子どもたちがインターネットゲームショップに夢中になり来館者が減るなど、社会の状況への対応が必要になってきています。

子どもセンター事業評価

子どもセンターが、子どもや地域に果たしてきた役割を調査し、センターの今日的な意味と、支援のあり方を明らかにするため、評価活動を実施しました。

7月～8月、10ヶ所のセンターでインタビュー調査をするともに、3ヶ所で「絵地図分析ワークショップ」を同手法の専門家である田島理事と協力しておこないました。



子どもセンターの役割は「子どもの能力や可能性を広げる場」という共通認識があり、センターが子ども達に役立っていること、存在価値を感じ取ることが出来ました。子ども達は、センターの魅力を「学校にはない沢山の活動があり、成績を評価されず、自分の興味があることを選ぶことができ、自分を表現できる」といい、設立当初の狙いを達成していることがわかりました。

子ども達がセンターに誇りを持って活動している一方で、大人達の子どもの成長をみる目、能力が不足しています。センターの存在意義を自分達でみつけ、地域のセンターを、子ども達にとってどのような価値のあるものにしていくか、自ら考え創り出すことができる人材を育成することが今後の課題です。

（ご支援：アーユス仏教国際協力ネットワーク）

プログラム支援

各センターからの申請内容を検討し、今期は以下の4ヶ所の子どもセンターにおいて、合計9プログラムの講師料・教材費を支援しました。

＜支援プログラム＞

- ・ヴィエンチャンCEC・・・「合唱」「伝統詠唱」「伝統楽器」
- ・シーサタナークCCC・・・「手工芸」「算数英語の補修」
- ・ポーテンCEC・・・「伝統音楽」「手工芸」
- ・パクライCEC・・・「伝統詠唱」「伝統音楽」

CEC=子ども教育開発センター/CCC=子ども文化センター
（ご支援：指定募金、庭野平和財団、アサヒワンビールクラブ）

カラーリボンプロジェクト及び職員の巡回

「世界の子どもたちに色とりどりの未来を」というカラーリボンプロジェクトで、500色のクレヨンセットの提供を受け、子どもセンターなど10ヶ所にスタッフが届けました。

ラオスでは”ぬり絵”ばかりで、創造的な絵を描く機会が殆どないことから、スタッフがリードし、「魔法の木の果物、乗り物、動物、ぼく・わたしの家、水中の生物、身の回りのもの」といったテーマをそれぞれ設定。これまで見たことがないようなカラフルな絵が完成すると、あちらこちらで歓声があがりました。



（クレヨンセットのご支援：株式会社フェリシモ）

高校生のための奨学金事業（受託事業）

昨年度に引き続き2年目の受託。高校生（中学5年～7年生）が対象で、実施にあたっては教育局と協力し、ヴィエンチャン都内にあるすべての公立中学高校、84ヶ所に願書を配布。提出された願書から書類選考し、審査員が直接学校や家を訪問し、面接（インタビュー）をおこない、100人の奨学生を決定。1年間の奨学金を支払いました。丁寧な選考方法が事業委託者から高く評価されています。

《The Siam Cement Public Co.Ltd.》

日本での活動

当会は、日本では東京に事務所を設け、現地プログラムの方針を立て、ラオスでの活動を調整する以外に、日本の多くの方に活動を知っていただき、ご支援や活動の参加をいただけるよう、呼びかけなどを行っています。また、ラオスの文化を紹介する、どなたでも参加できるイベントや、学校に出向いて国際理解教育の参加型プログラムも実施しています。いずれのイベントもボランティアの仲間とともに作り上げています。

小・中・高校・大学に、開発教育の授業を出前

当会スタッフが学校に出向き、国際理解教育（開発教育）の参加型授業を実施しています。今期は中学1校、高校2校の計3校で、ラオスの紹介や日本の絵本にラオス語訳を貼る「ラオス語絵本」プロジェクトを実施しました。



参加型プログラム

●スタディツアー

「代表チャンタソンと行くラオス～ヴィエンチャン・ルアンパバン・ムアンシンの旅～」というテーマで、12月にラオスへのツアーを実施しました。8名が参加し、活動視察と少数民族の村を訪れる旅となりました。

●ラオス語絵本プロジェクト

ラオスの子ども達に多様な絵本を提供するために、日本語の絵本にラオス語訳を貼り付けてラオスへ送るプロジェクトを実施しています。

昨年比17%増加し、今期は、28組が参加し478冊をラオスへ送りました。



●書き損じハガキの収集

書き損じハガキを集め、プロジェクト運営資金に活用しています。書き損じハガキ3枚が、ラオスの絵本一冊分に相当します。今期は、昨年より金額で約2.2倍に増加し、93件、422,170円相当のご寄付をいただきました。

勉強会・活動ミーティング

●勉強会

ボランティアの勉強会チームが中心になって、ラオスの文化や現地事情、食べ物、絵本など会の活動にちなんだテーマで、講演、料理教室などを行っています。ラオスからの留学生との交流の機会が得られることも、人気を呼んでいます。今期は、4回開催しました。

第17回 むかしばなしと絵本・うたあそびと読書活動

第18回 ラオスのことば～留学生と小1教科書で超入門

第19回 識字って、何だろう？

第20回 ラオス料理を作って・食べて・おしゃべりしましょ

●活動ミーティング

ボランティア、会員が集まる活動ミーティングは、計4回開催。参加者はのべ55名。

イベント開催

●ラオスの織物展示販売

ラオスの様々な民族の織物、刺繍を使った小物や洋服の展示販売を、各地のギャラリーなどの協力を得て開催しています。今期は、3回の織物展を開催し、委託販売などを積極的に実施しました。

●ラオスの正月「ピーマイパーティ」

ラオスは4月にお正月がやってきます。当会では毎年、東京・大田区内の施設で、活動の紹介をするとともに、ラオス料理を味わい民族舞踊などを楽しんでいただく、ラオス色満載のパーティを開催し、多くの方の好評を得ています。今期は161人が新年を祝いました。

●紙芝居コンクール応募

第24回箕面紙芝居コンクールに、創作紙芝居『スックおじさん』をラオスから応募。この紙芝居は、10代の学生が話を作り、20代の社会人が絵を描いたもの。2014年7月に実施された実演審査では、東京事務所スタッフが実演をおこない、特別賞＜一般の部＞「大阪国際児童文学振興財団賞」を受賞しました。

組織の運営

1. 全体運営

■理事会

理事10名、監事2名により運営され、年4回理事会を開催。財政問題について、臨時理事会を11月末に開催しました。出版事業では著作権問題について理事からアドバイスを頂き、出版事業の強化に反映させました。また物販、広報などの分野で担当理事の支援を受けました。

■運営

財政状況で困難が生じたが、支援者の皆さまへ「緊急募金」をお願いすることで、取りあえずの危機を乗り越えることが出来ました。

予算作成方法の変更、寄附メニュー経費についての改訂などをおこないましたが、資金調達は充分とはいえ、困難な状況は続いています。

東京事務所では各種規程類の整備、ラオス事務所では、勤務ルールなどの徹底により、徐々にアカウンタビリティの向上が図られています。

会員数(期末時)は、活動会員77名、サポーター会員157名で、共に目標値を達成しました。

■資金調達

東京事務所での物販活動、ラオス事務所での業務受託の増加などによる調達資金は増加。一般寄附は予算を達成できました。しかしプロジェクト援助金は予算額を達成できず、また必要十分な自己資金が確保できていないことから、安定した財務基盤を構築できていません。

オンラインカード決済は、契約会社の決済システムに安全上の問題があることから、6月に使用を中止しました。安全性が担保されたシステムの利用を、再開する必要があります。

■広報

ホームページやフェイスブックの記事更新、スタッフブログの更新は頻度をあげ、活動やラオスの情報を発信することが出来ました。メーリングリストでの告知も回数が増えました。英文ページの改善・ラオス語ページの完成、メールマガジンの整備が出来ませんでした。通信は、年3回計6000部、年次報告は1500部発刊しました。

2. 東京事務所

■体制

以下のメンバーにより運営されています。

常勤非専従事務局長 1名

常勤専従スタッフ 3名～4名

(9月にラオス事務所へ1名異動。12月に1名退職。1月に1名入職)

会計ボランティアスタッフの継続した協力により、事務局は支えられています。また年間を通じ活動する学生インターンも3名となり、興味がある分野や強みを活かし担当業務を明確にすることができました。

■総会

9月21日、第11期2013年度通常総会を開催し、活動会員40名(書面表決、委任状を含む)が参加し、第11期事業報告、会計報告が承認されました。

3. ラオス事務所

■体制

常勤スタッフ9名により運営しました。

事務所所長 1名

常勤専従スタッフ 7名

日本人駐在員 1名(9月から)

アドバイザー 1名

8～9月に2名、2014年7月に1名が退職。2013年6月～10月に4名を新規雇用。スタッフの入退職が激しい1年となりました。新規採用スタッフが半分を占める体制での事業実施は、人材育成を並行しておこなうことになり、新旧のスタッフ双方にとって厳しいものとなりました。

事業実施に向けたスタッフ育成として、公共の場でのパフォーマンス能力の向上を目的とした研修に参加。内部ではベテランスタッフによる広報ツールの作成及びアクティビティの能力向上の研修を実施しました。

■資金調達

ラオス経済の拡大に伴うインフレが進み、さらに政府による公務員給与の200%増額により、人件費などすべてのコストが上昇し、会の運営に影響を与えています。

高校生への奨学金事業は、昨年度に継続して事業を受託できました。また、図書室開設・フォローアップ費用について、ラオスの企業から継続支援を得られました。新規にスイスファンドによる助成プロジェクトに応募し、出版に関する研修への助成が決定しました。

図書販売、人気の高い本を出版する際、会資金による販売分を増刷し、順調に利益を得ています。

■ボランティア・インターン・訪問者

ラオス在住の日本人や、ラオスを旅行で訪れた会員をボランティアとして受け入れました。また、8月に3週間、学習院女子大学の学生5名を受け入れました。ラオス事務所や併設図書館への日本人来訪者が増加しています。



2013年度 第12期 会計報告 (2013年7月1日～2014年6月30日)

活動計算書

科 目	金 額
I 経常収益	
1.受取会費	910,000
2.受取寄付金	7,291,121
3.受取助成金等	17,282,283
4.事業収益	5,854,597
5.その他収益	295,111
経常収益計	31,633,112
II 経常費用	
1.事業費	
(1)人件費	10,973,368
(2)その他経費	18,512,665
事業費計	29,486,033
2.管理費	
(1)人件費	4,598,826
(2)その他経費	2,182,284
管理費計	6,781,110
経常費用計	36,267,143
税引前当期正味財産増減額	-4,634,031
法人税等	70,000
当期正味財産増減額	-4,704,031
前期繰越正味財産額	12,709,622
次期繰越正味財産額	8,005,591

貸借対照表

科 目	金 額
I 資産の部	
1.流動資産	11,643,081
資産合計	11,643,081
II 負債の部	
1.流動負債	3,637,490
負債合計	3,637,490
III 正味財産の部	
前期繰越正味財産	12,709,622
当期正味財産増減額	-4,704,031
正味財産合計	8,005,591
負債及び正味財産合計	11,643,081

事業別損益の状況

科 目	経常収益計	経常費用計
出版事業	944,942	1,620,748
図書活用強化事業	7,075,171	7,852,065
図書館事業	4,311,336	3,951,450
図書室地域化事業	5,068,310	5,319,877
子どもセンター事業	779,306	2,194,768
奨学金事業	3,387,987	3,382,182
特別実施事業	17,512	30,991
交流事業	2,703,997	2,882,880
収益事業	3,121,313	1,443,449
図書商品棚卸	0	807,623
事業部門計	27,409,874	29,486,033
東京管理費	4,155,853	5,634,188
ラオス管理費	67,385	1,146,922
管理部門計	4,223,238	6,781,110
合 計	31,633,112	36,267,143

東京事務所での物販活動、ラオス事務所での業務受託の増加などによる調達資金は増加しました。一般寄附は予算を達成しています。しかしプロジェクト援助金などは予算に達しておらず、また経費に対する必要十分な自己資金が確保できていないことから、安定した財務基盤を構築できていません。

12月に実施した「200万円緊急募金」に対して、82件163.8万円の募金をいただきました。

資金調達担当スタッフ、理事を設定しましたが、日常業務に追われ機能しませんでした。

【脇田監事からのコメント抜粋】

決算、予算はともに実態に即したものとすべき。最低でも、運転資金として、月平均支出の2～3か月分の資金ストックがあることが望ましい。指定募金額の減少は、ネットをもっと生かす活動により、改善した方がよい。

大きな資金を占めるJICAプロジェクトについては、2017年春の終了時の経営予測をおこなっておく必要がある。各プロジェクトにおける事務経費の負担率を算定しておく。

ラオス事務所の自立を準備しているのだから、ラオス事務所の自己資金調達率を上げるべき。運営資金の50%はラオスで調達でもいいのではないかな。

【矢崎監事からのコメント抜粋】

前期は黒字で終了することができたが、今期は、当初より厳しい予算編成であった上に、さらに資金不足が拡大するという状況で終了した。常に事業実施については予測不可能なこともありうるという心積もりで対応し、それに耐えるだけの財政基盤が求められる。数か月分の事業実施が可能な程度の財務基盤の構築は必須。

当面の課題は、資金繰りをどう乗り越えていくかだが、目の前のことだけではなく、長期的な視点も同時に持ち、現状を打開していった欲しい。

前期よりラオスでの資金調達が増えてきた。このことはラオスの自立化に向けても大きな前進だといえる。同時に、事業計画や資金調達をともに考え運営していくという視点からのラオス事務所の一層の成長を期待している。

□背景と方向性

ラオスの子どもたちに読書の楽しさを伝え、それぞれが、人生をより豊かに選ぶことができるような環境をつくる支援をする、というのが私たち「ラオスのこども」の使命です。しばらく前から、この活動を、日本のイニシアチブによるものから、ラオスの人々が主導するものに変え、活動主体をラオスに移行しようと方向転換を進めています。これは、ラオス事務所のスタッフだけのことでなく、私たちの活動を現場で協同している学校の先生方、役所の担当者などすべての人々の自発性を期待するものです。一方、ラオス社会の経済発展にともない、社会自体の関心は「個々」の生活の発展、変化に向かい、「社会」や「子ども」という大きなくりの状況改善には、少し関心が下がっているように感じます。読書の楽しさを伝えるという活動は、「光り輝くもの」からすこし「地味で日常的」なものに変わってきているようです。これは、社会に少しずつではあっても、読書が認知されてきていることの反映かも知れません。このような環境の変化の中で、「読書の楽しさを伝える」担い手をいかに育てるのか、「活動のための組織」の担い手をどのように育てるのか、模索が続いています。

一方、その活動を支える組織の経営の安定感が足りないことは、大きな問題です。これまでの30年以上にわたる活動の中で、会が蓄積してきた強みを生かし、世界、地球という枠組で、読書推進活動の意味を積極的に伝える努力を、今年度もおこなっていきます。

現在の第6次中期計画では、ラオスにおける読書推進活動で、担い手のひとりひとりの思いを繋ぎ、ネットワークを形成し、子どもたちの教育環境を改善する活動が、自立していくことを大きなテーマとしています。さらに2つの基本方針として、1. ラオスの急激な社会変化の中でNGOの役割を再確認する 2. ラオス事務所の自立を促進する ことをあげ、4つの重点項目として、1. 組織活動の質を高める 2. 健全な財務体質を構築する 3. 東京・ラオスともに活動の担い手の主体性・専門性を高める 4. プロジェクト評価とプロジェクトの方向性の再構築を図る と設定しています。今年度の事業計画は、中期計画の2年目の活動として作成しました。

今期の運営責任を持つ理事・監事は以下の12名です。

理事	・後藤 さち子	・猿田 由貴江
	・塩谷 光	・新藤 雅章
	・田島 伸二	・チャンタソン インタヴォン
	・富山 勝男	・野口 朝夫
	・広瀬 未奈	・森 透
監事	・矢崎 芽生	・脇田 康司

ラオスでのプロジェクト

I. 本に出会い、親しむ(読書推進活動)

●学校図書室の地域への展開事業

ルアンナムター県、ヴィエンチャン県の計6郡で、小中学校16校の教員、校長、児童生徒、保護者を対象とし、地域に根ざした図書活動を展開。地域住民を巻き込むことで、学校の図書活動の担い手の裾野を地域に広げます。今期は、対象校で図書室を開設。同時に図書室担当教員を対象とした研修を実施します。

●図書室の開設、図書の補充

上述の16校に加え4校で図書室を開設。過去3年間に開設した32校に補充図書を配布。既設のハクアーンを巡回訪問し、図書室運営のアドバイスと、図書活用方法の指導をおこないます。

●学校図書館の建設

教育システムの変更により、中学と高校が一貫の学校が増加している中、十分な図書館をもつ学校は

少ない。生徒数が多い中高一貫校では、空教室を使用した図書室だと、手狭で十分な活動が出来ないことから、大規模校に対応するために、独立した図書館を建設するプロジェクトをスタートさせます。

●ラオス事務所併設こども図書館の活動

子どもたちが主体的に参加できるアクティビティを工夫しておこないます。読みきかせやゲーム、各種ワークショップなどの活動を計画しています。広報を工夫し、更に利用者を増やす働きかけをします。また、図書活動のリーダーとなるボランティアを育成します。



Ⅱ. 本をつくる(出版プロジェクト)

今期は出版システムの確立、多様な本の計画的な出版、そして、ラオス事務所の事業の自立準備として出版の事業意識を高めることを目指します。

著作権についての知識を広めるため、専門家による研修会を実施します。また、出版の各プロセスでの能力を高め、計画的な出版をしていきます。

Ⅲ. 集い、表現し、学び合う(子どもセンター)

センターの職員や講師のモチベーションを引き出し、能力を高めるためのプログラムコンテストを企画します。各センターの努力により活動を活性化し、自立するよう支援します。また、日本の専門家を派遣し、「子どものために活動能力育成セミナー」を開催します。人件費は各センターが負担するように促し、教材費の実費支援へと切り替えていきます。



Ⅳ. 奨学金事業(受託事業)

2012年より協力してきた、SCG財団による高校生対象の奨学金事業を継続します。今期は奨学金受給者を200名、対象地域も2地域に拡大して実施する予定です。

日本での活動

「ラオス語絵本プロジェクト」「開発教育・国際理解」「スタディツアー」などの活動をおこない、ラオスの子どもたちの状況や会の活動への理解を深めます。また定例の活動ミーティング・勉強会では、活動を支える人々、関心を持つ人々とのネットワークを強めていきます。さらに、織物展示会を開くなど、自己資金獲得のための活動を、積極的におこないます。

組織の運営

運動体として、活動理念などを分かりやすく発信するよう心がけ、迅速な情報提供により、会員、理解者、支援者を増やし、資金調達力を高めることで経営の安定化を達成します。ラオスで展開している様々なプロジェクトの自立促進化への理解を広めます。東京事務所とラオス事務所との日常的なコミュニケーションを深め、さまざまなレベルでの情報交換、共有化、さらにラオス事務所スタッフの能力強化をおこなうことで、組織の運営能力の向上を図ります。

2014年度 第13期 予算 (2014年7月1日～2015年6月30日)

活動計算書

科 目	金 額
I 経常収益	
1.受取会費	1,200,000
2.受取寄付金	6,235,500
3.受取助成金等	28,608,566
4.事業収益	5,870,000
5.その他収益	100,000
経常収益計	42,014,066
II 経常費用	
1.事業費	
(1)人件費	13,660,163
(2)その他経費	19,874,528
事業費計	33,534,691
2.管理費	
(1)人件費	4,337,222
(2)その他経費	2,435,000
管理費計	6,772,222
経常費用計	40,306,913

事業別損益

科 目	経常収益計	経常費用計
出版事業	5,634,890	5,597,283
図書室地域化事業	13,104,400	13,104,400
図書館事業	2,125,000	2,643,310
図書館建設事業	1,941,066	1,941,066
子どもセンター事業	1,059,720	1,696,994
奨学金事業	6,383,990	6,383,990
特別実施事業	15,000	65,000
交流事業	920,000	320,000
収益事業	5,050,000	1,782,648
事業部門計	36,234,066	33,534,691
東京管理費	5,400,000	5,429,010
ラオス管理費	80,000	1,343,212
管理部門計	5,780,000	6,772,222
合 計	42,014,066	40,306,913

自己資金調達能力の向上により、財政基盤を強化します。わかりやすい提案書・企画書で、より多くの組織に働きかけ、新規支援者を開拓します。また、ラオス事務所での資金調達を拡大します。